

---

熊木杏里『群青の日々』ライナーノーツ

---

熊木杏里、15周年にして10作目のオリジナルアルバム。

---

そのタイトルが『群青の日々』。往年のファンであれば、この情報だけで期待値が一気に高まったことだろう。15年前の「窓絵」でのデビューから今日に至るまで、彼女はその人生のときどき（ひきこもりだったり、外界と触れることの喜びを覚えたり、恋をしたり、その恋に傷ついたり、自分を変えようと思ったり、結婚したり、子供を出産したり、その上での現実を憂えたり、それでも私はこの場所で歌っていくんだと鼓舞したり）を様々な歌にしてきたけれども、その決して一点に立ち止まらずにはいられない人生＝音楽に色の名前を添えるとするならば、それは間違いなく深い青＝“群青”だからだ。晴れやかでもないし、暗闇に飲み込まれるでもない、でもその狭間で確かな存在感を誇る幻想的な色。赤い炎のように単純明快な熱さにどこか憧れながらも、静かに青い炎を揺らしながら人々の心を深いところから確実に燃やしてきた、熊木杏里を物語る色。

---

そんな彼女の群青の日々は、本人が「ひとつの時代が終わった」と表現した前アルバム『飾りのない明日』、そして「もう子供だった頃には戻れないんだな、そう思うと涙が出てきて……」と泣いた【熊木杏里 LIVE TOUR 2016 “飾りのない明日”】でひとつの到達を見たと思われたが、その先の時代の始まりとなる『群青の日々』を聴いて思わずニヤリと笑ってしまった。15年の歳月の中で時に嫌になるほど熊木杏里というものと対峙し、そこで生まれる戸惑いややりきれない想いみたいなものも歌に乗せてきた彼女だが、この『群青の日々』と名付けられたアルバムはそんな自分自身をよく熟知した上で、井上陽水や遠藤賢司といった敬愛するフォーク界の大先輩を堂々とオマージュしたり、青い炎を持つ自分だからこそ歌いたいのだという意思を明確に感じさせる題材の曲がいくつもあったり、かつての「長い話」ではないが、今日までの自分の人生＝群青の日々をひとつの歌にしてみせたり……生涯付き合っていくには実に面倒くさい（悪口ではありません。それが熊木杏里なのです）と思われる自分自身をすべて受け入れ、だからこそ私は熊木杏里なのだと言わんとする人間の楽曲群となっている。

---

振り返ってみれば、今日に至るまでの15年間。まだまだ子供だった頃も、世界が色めき出して明るくなっていった頃も、恋に破れて急に大人びた頃も、自分の理想と現実のギャップに悩んでいた頃も、マタニティブルーに不安になっていた頃も、もう子供には戻れないんだと泣き出したあの日も、彼女は「私は何者なんだ？」といつも自分に問いかけていた。そんな群青の日々はおそらくこれからも続いていくんだろうけど、このアルバムは「熊木杏里として生涯歌い続けていく」と覚悟を決めた作品のように思う。ようやく観念したアルバムとも言える（笑）。でもそれがとても嬉しい。何故なら、僕は貴女がようやく観念して受け入れたその人の15年モノのファンですから。今度会うことがあったら「この熊木杏里ってアーティスト、なかなか良いでしょ？」と本人に言ってやりたいと思います。

---

祝辞：平賀哲雄（15年モノのファン）

---